

群 教 セ	H01 - 01
	令5.284集
	幼児教育

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と 非認知能力の視点からの幼児理解の充実

——互いに思いを受け入れながら遊び込める活動を通して——

特別研修員 山崎 一秀

I 研究テーマ設定の理由

近年、幼児教育における非認知能力の重要性に注目が集まっている。しかし、非認知能力についての概念的な整理がまだまだ十分でなく、幼児教育の現場ではどのような非認知能力が幼児たちの中で育っているのかが理解されていない現状がある。

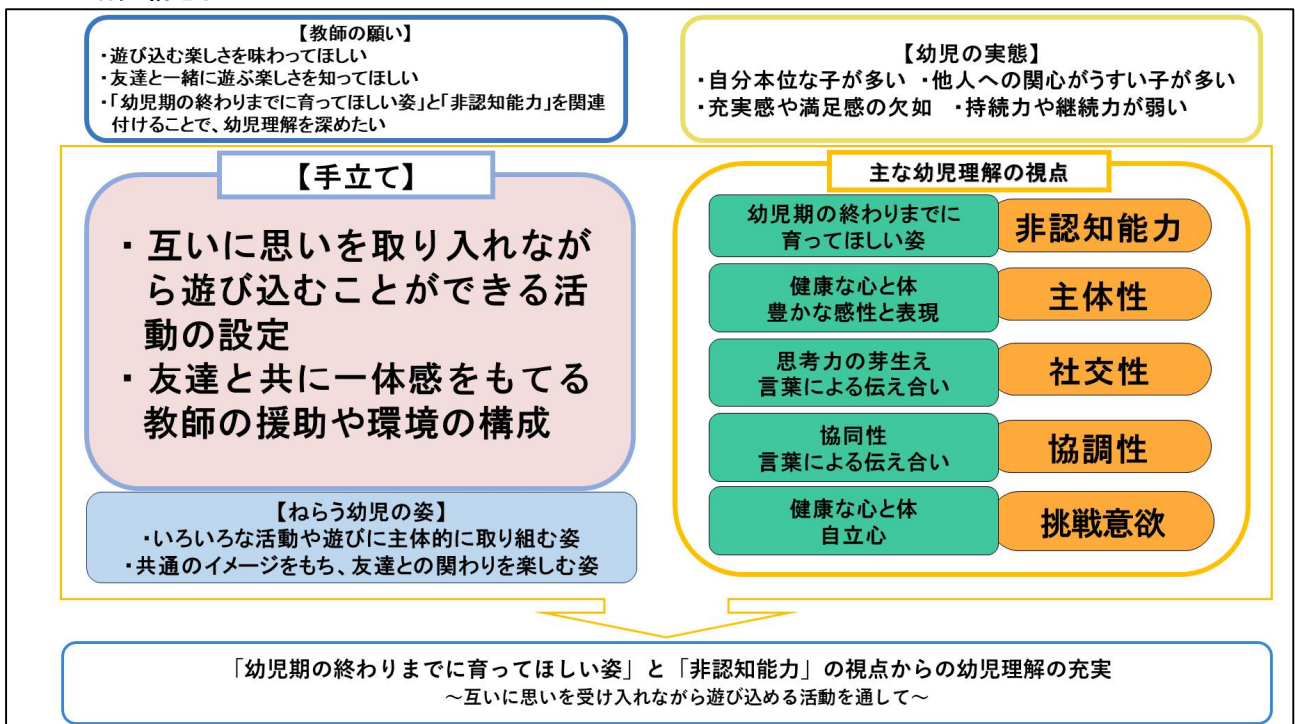
幼稚園教育要領では、幼稚園教育において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿として幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が示されており、その中には、協調性や主体性、創造性など、非認知能力と重なる部分が多く含まれている。そのため、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を活用して幼児理解を深めることは、非認知能力の育ちを捉える上でも有効であろうと考える。

研究協力園の幼児の実態として、人との関わりに興味を示さない幼児や、友達と一緒に楽しく遊ぼうとする意欲が低い幼児が多く、幼児期に重要視されている人格形成の基礎となる協同性等が十分に育っていない。

そこで、幼児が友達との関わりを楽しみ、互いに思いを受け入れながら遊び込む経験をする中で現れてくる育ちを、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と非認知能力の視点から捉えることで、幼児理解の充実を図りたいと考え、本研究のテーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

友達との関わりを楽しみながら遊び込むことができるように次のような手立てを講じた。

手立て1 互いに思いを取り入れながら遊び込むことができる活動の設定

- ・幼児が思いを伝えたり、友達の思いを聞いたりすることで楽しさが増すような遊びを設定する。
- ・幼児が試行錯誤を楽しみながら繰り返し遊ぶことのできる環境を構成する。
- ・一人では実現できないような思いやアイデアが生まれるような環境を設定する。
- ・幼児のつぶやきや発見、思いなどをつなげていく援助をしていく。

手立て2 友達と共に一体感をもてる教師の援助や環境の構成

- ・共通のイメージをもてるような教材の工夫を行う。
- ・幼児が遊びの世界に没頭できるような、活動の仕掛けや流れを設定する。
- ・幼児が一丸となって取り組みたくなるような活動を設定する。

上記のような手立てによって、幼児が互いに思いを受け入れながら遊び込めるようにしていく。そして、その中で現れた幼児の育ちを、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿と非認知能力を視点として多面的にみることで幼児理解の充実を図っていく。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 互いに思いを取り入れて友達と一体感をもてるような援助をしていったことで、幼児が主体的に遊び込み、個々に思いが生まれていった。また、その個々の思いを生かしながらイメージを共有していく場面や困難に直面した場面において協力する姿が顕著に見られ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「非認知能力」という視点から見ても複層的に幼児の育ちを見とることができた。
- 幼児が自分たちの力で遊びを進めていき、楽しむことができたという「満足感」や「達成感」を得るためには、全て満たされるような環境の構成や教師の援助が効果的であるというわけではなく、幼児にとって必要な経験は何かという視点をもって、時には満たされない環境を意図して構成し、幼児に託す援助をしていくことが、保育の質の向上においてとても重要なことであると分かった。

2 課題

- 幼児同士の関わりから育ちを見とることを目的としていたため、関わっているという姿を表面に現れる姿として捉えてしまうことがあったが、直接的に関わっていなくても、幼児たちの中で遊びや思いがつながっていることが多々あったため、更に幼児の心情にも目を向けていく必要がある。
- 本研究では、幼児の「非認知能力」の成長について、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と重なる部分に着目し、保育実践に生かしていくことを目指した。しかし、本研究における実践では、想定した非認知能力以外にも様々な非認知能力が発揮されていたため、その育ちについて十分に見とることができなかった。幼児理解をさらに充実させるためには、幼児の育ちを多様な非認知能力の視点から捉えていく必要がある。

実践例

1 本実践について 活動名「海賊ごっこ」

進級当初の幼児は、コロナ禍の影響もあり、人と関わる経験が十分にできなかったことから、友達との関わりに魅力を感じていない様子が見られた。そのため、友達との遊びに興味や関心をもつ幼児が少なく、遊びが盛り上がり、長続きしないことに課題が見られた。このような姿を受け、幼児が主体的に遊びを進めていきながら、友達と共通のイメージをもって遊び込むことができるよう、次のようなねらいに沿って環境を構成した。

2 研究に関連する実践当日のねらい及び内容

(1) ねらい

○共通のイメージをもちながら友達と関わりをもって遊びを楽しむようになる。

○自分の思いやアイデアを発揮し、友達の思いやアイデアにも気付き、互いに取り入れながら遊びを楽しむことができるようになる。

(2) 内容

・「海賊ごっこ」を通して、自分のイメージするものを作ったり、友達と思いやアイデアを伝え合ったりすることを楽しんでいく。

・様々な材料を自分なりに工夫しながら遊びに必要なものをつくっていく。

3 本実践で具体化した手立て

遊びを楽しむ過程で共通のイメージをもち、幼児同士の思いのやりとりが生まれるよう以下の手立てを実施した。

手立て1 互いに思いを取り入れながら遊ぶ込むことができる活動の設定

① 絵本や図鑑を読み、また「おてて絵本」という手を絵本に見立て、オリジナルのお話を話して楽しむ遊びを継続的に行った。「海賊」という遊びの題材に慣れ親しむと共に具体的なイメージがもてるようにした。

② 幼児から自由な発想が生まれ、より多くの思いがでてくるよう紙、箱、段ボールなど様々な材料を用意し、物的環境を整えた。

③ 一人では思いを実現することが難しかったり、協力することでより遊びが魅力的になったりする物的環境を構成した。

手立て2 友達と共に一体感をもてる教師の援助や環境の構成

① 遊びの世界に入り込めるよう、幼児の思いやアイデアを生かしながら海賊旗、海賊バンド、宝の地図などの教材を多数用意し、一緒に遊び進める仲間としての意識を高めた。

② 遊びの中で生まれた幼児のつぶやきやアイデアを受け止め、クラスに共有することで協力しやすい関係を構築していった。

③ 遊びに行き詰まったり、困ったりした際には教師が問題を解決するのではなく、幼児一人一人の個性を生かし、幼児同士をつなげて幼児たち自身の力で遊びを展開することができるように援助をしていった。



自分たちで考え、作った海賊旗



一人ひとりが作った海賊バンド

4 本実践に関連した「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「非認知能力」

	幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	非認知能力	具体的な幼児の姿
ア	健康な心と体・豊かな感性と表現	主体性	・期待をもって遊びに取り組む姿
イ	協同性・自立心・思考力の芽生え	協同的問題解決能力	・友達と協力して思いやイメージを実現しようとする姿
ウ	協同性・言葉による伝え合い	協調性	・共通の目的に向かって力を合わせる姿
エ	思考力の芽生え・言葉による伝え合い	社交性	・遊びを楽しむ中でいろいろな友達と関わる姿
オ	健康な心と体・自立心	挑戦意欲	・粘り強く遊びに取り組む姿
カ	思考力の芽生え・豊かな感性と表現	創造力	・自由な発想で遊びを楽しむ姿

5 前日までの抽出児の様子

- D児は、友達と一緒に海賊ごっこを遊びたいという思いはあるが、なかなか自分の思いを友達に伝えることができずにいた。
- F児は、友達との関わりよりも自分の世界感を大切にしてくださいを楽しむことが多いが、海賊ごっこでは友達との会話も増え、自分の思いを友達に伝えようとする姿が現れ始めた。
- I児は、海賊という遊びの世界に入りこみ、海賊になって冒険や戦いを繰り返し楽しむ姿が見られた。
- M児は、自由な性格を発揮し、いろいろな友達と関わりながら海賊として冒険や船づくりなどを楽しんでいた。

6 保育の実際

幼児は、様々な材料を用いて、それぞれが自分のイメージする海賊の武器を作り始めた。数人の幼児が武器を完成させ、友達と一緒に戦いを楽しみ始めた。以下は、その際のやりとりである。

研究に関わる幼児の姿及び教師の援助・環境の構成

- I児「やったー武器ができた」 (ア)
M児「僕もできた。先生見て見て」 (エ)
 T 「すごくかっこいい武器ができたね。強そう」
I児「かっこいいでしょ。僕の強いんだよ」 (ア)
M児「僕だって強いよ」 (ア)
I児「じゃ戦ってみようぜ」 (エ)
M児「いいよ。勝負だ」 (エ)



これらの姿からは、出来た武器に喜び、戦いをして遊びたいという「健康な心と体」に関わる姿や友達に自分の武器を見せ、紹介するという場面では「豊かな感性と表現」として姿を見とることができた。また、友達と戦いたいという思いや、その思いを友達に伝える姿からは、「協同性」や「言葉による伝え合いに関わる姿」も見とることができた。上記の姿を非認知能力の視点から捉えると「主体性」や「社交性」が育まれた姿と見とることができる。

その後、遊びが停滞する様子が見られたため、教師は別室に板状の段ボールがあることを興味のあるような幼児に知らせ、自分たちでみんなが乗れる海賊船をつくることのできるよう環境の再構成を行った。以下はその際のやりとりである。

研究に関わる幼児の姿及び教師の援助・環境の構成

G児「段ボール持ってきたよ」(ウ)
 J児「これで船つくろうか」(ウ・カ)
 D児「いいね。みんなで乗れるくらい大きな海賊船にしようよ」(ウ)
 と指を差し思いを伝えるD児
 G児「いいね」
 T 「大きな海賊船になりそうだね」
 J児「楽しそう」
 M児「ここここをくっつけようよ」(ウ・カ)
 G児「うん」



これらの姿からは、大きな海賊船を作るために友達を誘ったり完成した海賊船のイメージを言葉で伝えたりする「言葉による伝え合い」に関わる姿や、友達と一緒に海賊船を作ろうとする「協同性」に関わる姿を見とることができる。また、「みんなで乗れるくらい大きな船」というイメージを膨らませる様子からは、「豊かな感性と表現」に関わる姿を見とることができた。上記の姿は、非認知能力としての「協調性」や「創造力」が育まれた姿と捉えることができる。

さらに遊びが進んでいき、船の側面を作る段階に入っていた。あえて自立しない板状の段ボールを用意したことで、互いに協力し合って遊びを進める姿が見られていった。

研究に関わる幼児の姿及び教師の援助・環境の構成

M児「ここを作りたいんだけど倒れちゃうな。どうしよう」(イ)
 M児のつぶやきに気付き、倒れてしまう段ボールを支えようとするF児
 F児「僕が押さえてあげようか」(イ)
 M児「うん。ありがとう」(イ)
 T 「Mくん優しいね。FくんとMくんで力を合わせるとカッコいい海賊船ができるね」
 M児「そうだよ。俺たち仲間だもんね」(イ)
 F児「うん。力を合わせると凄いのができるんだよ」(オ)
 仲間意識をもち、協力して船を完成さようとするM児とF児
 T「いいね。完成が楽しみだね。」
 F児「うん。カッコいい海賊船作りたいな」(オ) M児「頑張るぞ」(オ) F児「おー」(オ)



これらの姿からは友達に困っていることに気付き、共通した課題として一緒に取り組もうとする「協同性」や、板状の段ボールを垂直にとめる時誰かが押さえてなければとめることが難しいことに気付く「思考力の芽生え」、目標をもって自分たちで頑張ろうとする「自立心」や「健康的な心と体」に関わる姿を見とることができた。上記の姿は、非認知能力として「協同的問題解決能力」や「挑戦意欲」が育まれた姿と捉えることができる。

6 考察

今回の海賊ごっこを始めるにあたり、幼児の「遊びたい」という意欲を様々な方法で高めたうえで遊びを始めた。それによって幼児が主体性をもって遊びを楽しみながら取り組む姿が継続的に見られた。また、主体性をもって取り組んだことで、自ら考え、協力し、思いを実現するために挑戦し続ける姿が多く見られた。そして、幼児の思いを実現するために協力を必要とする環境をあえて用意したことで、幼児が協力して遊びを発展させていく場面が多く見られた。

どの場面においても「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と「非認知能力」の両方を見とることができた。特に幼児が主体性をもって友達と関わりながら遊びを楽しむ際に複層的に現れるため、それらを見逃さずに幼児の成長を見とり、幼児理解をしていくことが重要であると感じた。